口絵３　源義経と武蔵坊弁慶
（狩野吉信筆「源平合戦図屏風　一ノ谷合戦図」、神戸市立博物館蔵　より）

口絵４　平敦盛（同上）

【研究ノート】

神戸市立博物館蔵「源平合戦図屏風 一の谷・屋島合戦図」の描写について
―『平家物語』関連作品との対照を通じて―

三好　俊

源氏と平氏の合戦を描いた「源平合戦図屏風」は多くの作例が遺されている。神戸市立博物館においても、狩野吉信筆「源平合戦図屏風　一の谷・屋島合戦図」を所蔵しているが、図中の場面比定が行われた他に、詳細な分析は行われていない。そこで本稿では同図について、主に『平家物語』の記述と図様の差異に注目して分析し、そこから見出される同物語の関連作品の影響について言及し、合戦図研究に資することを目指す。

はじめに

『平家物語』を主な題材に、源氏と平氏の合戦を描いた「源平合戦図屏風」は、特に近世に盛んに制作され、多くの作例が遺されている。[一] 文献史料上では、寛正四年（一四六三）の『蔭涼軒日録』にて「当院（鹿苑院）平家屏風為御覧被召寄也」[二]との記述が確認でき、屏風絵に限らなければ、『看聞日記』[三]や『実隆公記』[四]において「平家絵」がみられる。琵琶法師の語りを通じて広まった『平家物語』を絵画化して鑑賞する動きは室町時代ごろよりあった。

源平合戦図屏風については、美術史研究の川本桂子氏[五]、田沢裕賀氏[六]により、現存諸本が分類され、その後に両氏の論を踏まえ、橋村愛子氏[七]、出口久徳氏[八]がさらに詳細な分類を行っている。また近年では、多くの作例が知られる、生田森・一の谷合戦[九]と屋島合戦を題材に合戦の様子を俯瞰的に描いた屏風に関して、作品の描写や構図に踏み込み、内在する意味を読み解く研究や、制作された時代の社会意識と関連付ける研究が進められている。[一〇]

源平合戦図屏風の描写に関しては、伊藤悦子氏によって精力的な研究が行われている。[一一] 伊藤氏によると、源平合戦図屏風諸本には、先行する絵巻や扇面絵・貼交屏風と共通する図様がみられ、室町時代の祖

型より、それらに類する粉本を取り入れることで増補・改変を繰り返し派生していったとされる。伊藤氏の研究は源平合戦図屏風の複数の作例に基づき網羅的に考察したものであるが、同氏の指摘にあるように制作にあたって様々な粉本が利用されていることや作品ごとに地域性がみられることを鑑みれば、個別の作品の特徴や制作過程に関する研究成果を蓄積していく必要性があるだろう。

そこで本稿では、神戸市立博物館（以後、「当館」とする）が所蔵する「源平合戦図屏風　一の谷・屋島合戦図」[一二]（図1、以後、「本図」とする）について、分析を行うこととする。本図は、当館の所蔵となる以前よりその存在が知られ[一三]、当館が企画する展覧会を中心に度々出品されてきたものであるが、図録『源平物語絵セレクション』[一四]において図中の場面比定が行われたことや、研究史上において他作品との比較対象として取り上げられることを除けば、詳細な分析を経ていないものである。先述した近年の源平合戦図屏風に関する研究動向を踏まえるならば、ここで本図の特徴を明らかにしていくことは一定の意義が認められるだろう。本稿においては、紙幅の関係もあり、主には元となった『平家物語』の記述[一五]と図様を対照しながら、分析を進めていくこととする。

一、本図の概要

本図は江戸時代、十七世紀の制作と考えられる、それぞれ一五四・五×三五一・〇センチメートルの六曲一双の屏風絵である。右隻には寿永三年（治承八年、一一八四）二月七日の生田森・一の谷合戦、左隻には同月十九日の屋島合戦が描かれる。両隻の端には「狩野吉信」の落款、印章が確認されるが、埼玉県川越市の喜多院に所蔵される「職人尽図屏風」を描いた狩野吉信とは別の人物と考えられ、作者の詳細については不明である。

画面上の描写に目を移せば、右隻、左隻ともに『平家物語』に語られるエピソードが散りばめられつつ、群衆や船団が随所に配置され、合戦のもつエネルギーが表現されている。描かれた生田森・一の谷、屋島合戦は『平家物語』中でも特に人気を集めた場面であり、源平の武将たちの逸話が多数含まれる。屏風の画面中では散りばめられた金雲が漫画のコマ割りのような役割を果たしており、多くのエピソードが展開された広い戦場が、距離的に違和感がないように描かれている。源平合戦図屏風は、最古本とされる智積院蔵「一の谷合戦図屏風」（以後、「智積院本」とする）のように『平家物語』由来の逸話を中心に画面が構成されるものから、群衆を描くことに力が注がれ、逸話が後景に退くという変遷が見られるが、本図の図様に関しては逸話を忠実に描き出そうとする姿勢がうかがえる。例えば、『平家物語』巻第九「盛俊最後」[一六]に

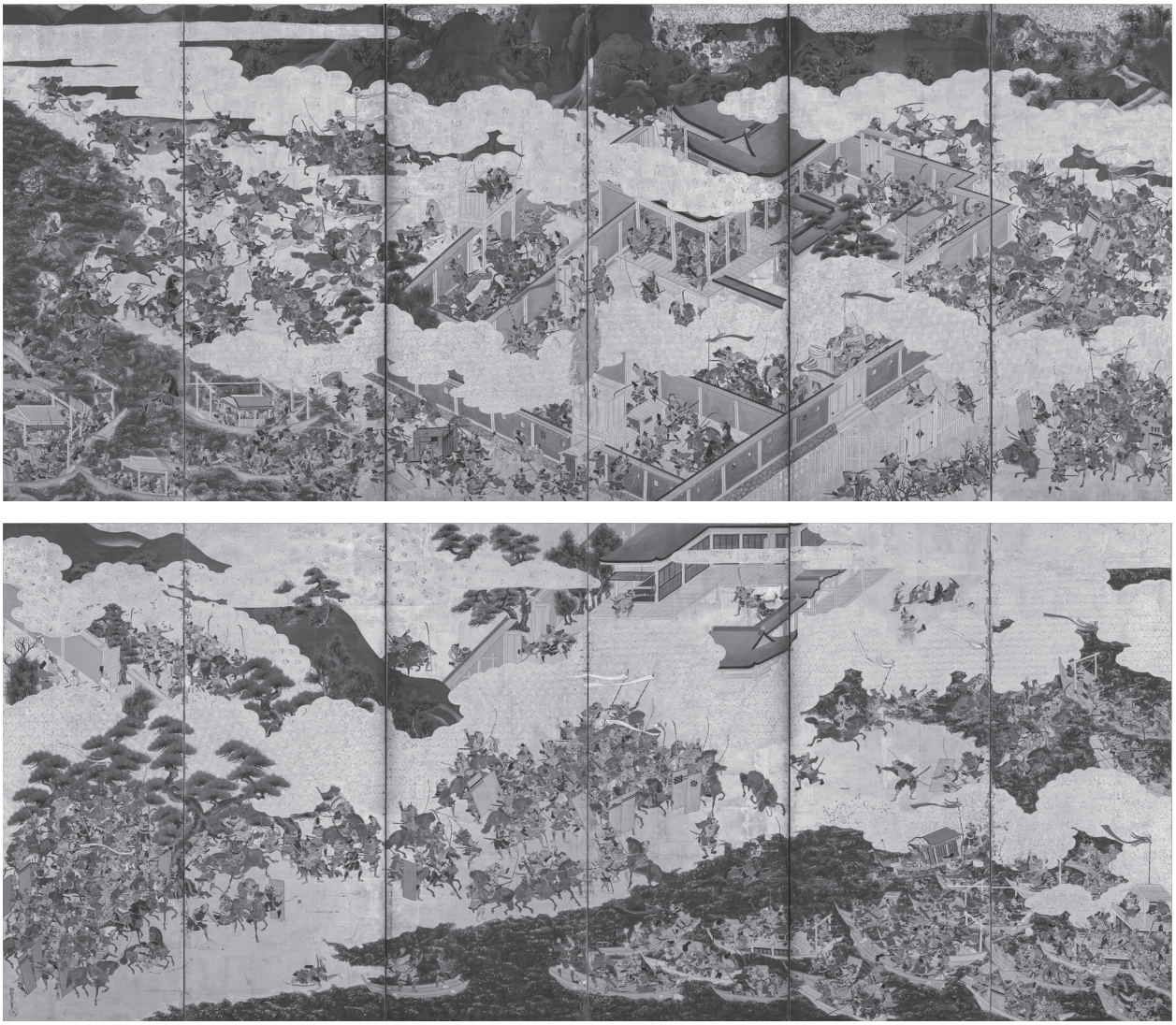

図1　狩野吉信筆「源平合戦図屏風　一の谷・屋島合戦図」　神戸市立博物館蔵

よると、平氏の有力家人で「山の手」（鵯越のふもと）を守っていた平盛俊は源氏方の猪俣小平六則綱に水田へ突き倒され討ち取られたとされる。そのシーンが本図右隻第六扇上部に描かれているが、尻餅をつく盛俊の周囲のみ、他の平氏の武将たちが海上の船を目指して敗走する場面とは明確に描き分けられ、そこが波打際でなかったことが一目でわかる（図2）。逸話を画面中という限られた範囲に収めながら、背景を区別するという工夫を加えることで『平家物語』の記述をより忠実に描き出そうという制作者の姿勢が読み取れる。また、右隻の第三扇上部から第四扇上部にかけて、山中を進む源義経軍に驚いた鹿がふもとの「平家の城郭一の谷」まで下り、不審に思った武智清教に弓で射られるという『平家物語』巻第九「坂落」のエピソードが描かれている（図3）。これについても、「牡鹿二つ射とどめて、牝鹿をば射いでぞ通しける」[一七]との『平家物語』の記述に従い、矢の刺さった角のある鹿二頭と、矢が刺さっておらず角もない鹿一頭が描かれている。このような細やかな表現についても、丁寧に描写されており、本図の制作にあたっては『平家物語』の記述がかなり意識されていたと考えられるだろう。

しかし、図様の一つひとつを詳細に観察すると、その中に『平家物語』による情報だけでは描き出せないものも見出せる。それらについて、以下に考察を試みたい。

図2　尻餅をつく平盛俊（中央）

図3　牡鹿（上、右）と牝鹿（左）

二、他の文学作品の影響を受けたと考えられる描写

(1) 弁慶の姿

本図に描かれた、生田森・一の谷合戦および屋島合戦における源氏方の主役はやはり源義経であろう。画中には複数の義経の姿が確認でき、それを追うことで『平家物語』に語られる合戦の展開を理解することができる。義経の傍らには、家臣である武蔵坊弁慶が漏れなく確認でき、画中に描かれた他の人物とは明確に描き分けられている（口絵3）。色黒の僧形という、他の絵画作品や漫画・アニメ、実写ドラマでも踏襲される、私たちが弁慶と聞くと思い浮かべるイメージそのものである。描かれた人物の中でも異形の弁慶は、義経を探し出す目印として機能していると言えるだろう。

この弁慶であるが、『平家物語』における登場回数は少なく、描写も非常に淡白である。巻第九「三草勢汰」において、「搦手の大将軍」義経に付き従う武者の名前の中に「武蔵坊弁慶」が見える他、巻第九「老馬」にて「ここに武蔵坊弁慶、或老翁一人具して参りたり」、巻第十一「嗣信最後」では「武蔵坊弁慶などいふ、一人当千の兵ども」[一八]とあるが、弁慶の具体的な特徴については言及されていない。また、本図に描かれた合戦の場面以外では、巻第十一「檀浦合戦」、巻第十二「土佐房被斬」において「武蔵坊弁慶」の記述があるが、いずれも名前のみで、そこから私たちがイメージする弁慶像にたどり着くことは難しい。

図４　猟師の老翁と子息と対面する源義経

弁慶の容貌については、『平家物語』の異本の一つである『源平盛衰記』[一九]が詳しい。巻第三十六「鷲尾一谷案内事」において、弁慶の装束を「褐色の直垂に黒革縅の鎧に、同じ毛の兜に、三尺五寸の黒漆の太刀帯いて、黒羽の征矢負ひて、塗籠の弓に、好む長刀取具して」と記し、「元来色黒く長高き法師なり」と身体的な特徴にも触れている。本図の弁慶は、色黒で黒い鎧を着ており、この『源平盛衰記』における描写が近しいと言えるだろう。ただし、この一の谷を案内させるというシーンについて、『源平盛衰記』では弁慶が老翁の家を訪ね、老翁の子息を義経のもとに連れてくるという展開になっており、老翁と子息が義経と対面している本図の構図（図４）とは食い違っている。構図だけ見れば、本図は老翁が義経と対面する『平家物語』における展開を採用しており、製作にあたって複数の作品の情報を取り入れていることが分かる。

また、本図の弁慶は、所謂「弁慶の七つ道具」を背負っている。いずれの図様も小さく、種類の特定は難しいものの、『平家物語』『源平盛衰記』どちらにおいても確認できない表現である。弁慶の持ち物については、南北朝時代から室町時代初期成立の『義経記』[二〇]にて大刀・刀・鉞・薙鎌・熊手・櫟の木を鉄伏せにした棒が登場し、以後、数や種類が変動しながら、江戸時代以降の文学作品に登場するようになる。享保十六年（一七三一）初演の「鬼一法眼三略巻」[二一]では、「弁

図５　鐔引き

慶の七つ道具」は熊手・薙鎌・鉄の棒・木槌・鋸・鉞・刺股とされる。本図の弁慶の持ち物の描写が、どの作品によるものか特定することは困難であるが、ここにも『平家物語』以外の文学作品の影響が指摘できる。

(2)美尾屋十郎の折れた刀

本図の左隻第二扇中頃には、『平家物語』巻第十一「弓流」[二二]において、源氏方の美尾屋十郎が平景清（藤原景清、悪七兵衛）に甲の錣を引きちぎられるシーンが描かれている（図5）。「錣引き」と呼ばれる、人気を集める源平の逸話の一つである。

ここで注目したいのは、美尾屋十郎と平景清の間に描かれた、折れた刀の先である。左側の美尾屋が握っている刀は先が折れており、この「錣引き」のエピソードの中に含まれる描写であろう。しかし、『平家物語』の記述をみても、錣が引きちぎられるのみであり、刀に関する言及はない。これも、『平家物語』以外の作品をもとにした描写と考えられる。

この「錣引き」についても、逸話としての人気からか多数の派生作品を生み出している[二三]。そのうち、室町時代に成立した謡曲「八島／屋島」[二四]で「彼の三保の谷は、戦の最中に、太刀を折ってしまう」、元禄元年（一六八八）ごろに成立した土佐少掾橘正勝による浄瑠璃「大やしま（のぼり八島）」[二五]において、「みをのや太刀を打おつて力なく少引しりぞく」という、美尾屋の刀が折れる表現が確認できた。具体的な作品名の特定は困難であるが、本図の製作においては、軍記物に加え、芸能をも参照していた可能性を指摘することができるだろう。

三、他の絵画作品と比較対照しての検討

(1)平敦盛の馬

『平家物語』の中でも、長い歴史の中で特に人々の心を打ち続けているのは、巻第九「敦盛」にて語られる、平敦盛の悲話であろう。多くの派生作品が生み出され、学校の教科書などで現代人にもなじみのあるエピソードである。生田森・一の谷合戦を描いた屏風絵には必ずと言って良いほど、この逸話が描かれており、本図においては右隻第六扇中頃に確認できる（口絵4）。

『平家物語』流布本では、合戦時の敦盛について「練貫に鶴縫うたる直垂に、萌黄匂の鎧着て、鍬形打つたる甲の緒をしめ、金作りの太刀を帯き、二十四差いたる截生の矢負ひ、滋籐の弓持ち、連銭葦毛なる馬に、金覆輪の鞍置いて乗つたりける者一騎」[二六]と詳細に記しており、覚一本[二七]もこれと重なる。延慶本[二八]では「赤地ノ錦ノ鎧直垂ニ、赤威ノ鎧ニ、白星ノ甲着テ、重藤ノ弓ニ切符矢負テ、金作ノ太刀ハイテ、サビツキゲ

ノ馬ニ、黄伏輪ノ鞍置テ、厚房ノ鞦懸テ」、『源平盛衰記』では「紺錦直垂に、萌黄匂の鎧に、白星の甲着て、滋籐弓に、十八指たる護田鳥尾の矢、鵜毛の馬に乗給」[一九]とある。本図の敦盛の図様と対照すれば、萌黄色の鎧・鍬形の甲など流布本の記述に近しいと言えるだろう。

さて、ここで問題としたいのは、流布本で「連銭葦毛」とされる、敦盛の馬である。「連銭葦毛」とは、栗毛（黒色）・青毛（青みを帯びた黒色）・鹿毛（茶褐色）の原毛色に後天的に白色毛が発生してくる「葦毛」に銭を並べたような灰白色のまだら模様のあるもの[二〇]、である。しかし、本図の敦盛の馬については、まだら模様は確認できるものの、茶系統の毛色で描かれている。原色毛の鹿毛とする余地はあるものの、「葦毛」を忠実に描写しているとは考えにくい。「れんせんあしけの馬」との記述のある、当館蔵の「小敦盛絵巻」[二一]において、敦盛は白色をベースとした毛色の馬に跨って描かれていることを合わせて考えてれば、流布本の記述によるだけで本図の敦盛が描かれたとは言えない。『平家物語』諸本に合致する描写がないのであれば、本図の敦盛に関しては別の情報源によったと想定できる。

その特定は困難を極めるが、可能性の一つとして、先行する絵画作品からの引用について指摘しておきたい。智積院本は製作時期が室町末期・十六世紀後半と考えられ、源平合戦図屏風の最古態とされるが、これにおける敦盛の馬は茶色で描かれている[二二]。本図が智積院本を参照して描かれたとは断言できないが、これに連なり敦盛の馬を茶系統の色で描いた絵画作品を参照していた可能性もあるだろう。

(2)平宗盛の姿

本図において描かれた『平家物語』の逸話については、先述のとおり、『源平物語絵セレクション』[二三]にておおよそのところが比定されている。しかし、未だ特定に至っていない描写もあり、右隻第六扇下部に見える、船に乗った甲冑をつけていない、模様の入った白い着物を着た人物もその一つである（図6）。戦場から敗走する船の中、鎧武者に囲まれ、浮かない表情にも見えるその人物は、群衆の一人とするには、明らかに異質であり、何かを意図して描かれたのではないかと考えられる。

この人物について考察する上で参照したいのが、大英博物館が所蔵する、一の谷合戦を描いた右隻と屋島合戦を描いた左隻からなる、「源平合戦図屏風」（江

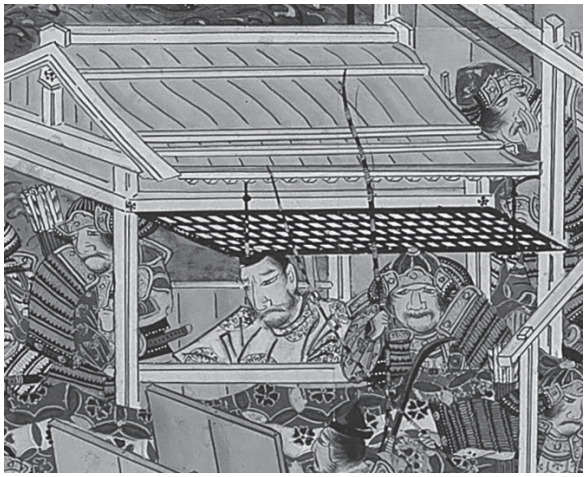

図6　船に乗る白い着物の人物

戸時代、十七世紀。以後、「大英本」とする[三四]である。大英本は、川本桂子氏によると、天真寺が所蔵する「一の谷・屋島合戦図屏風」（以後、「天真寺本」とする）とともに、最古態である智積院本と同一の系列に属し、智積院本の図様（粉本）を継承した上で新たな創意を盛り込んで完成度を高めた作品とされ[三五]、人物名を書いた付箋がつけられている点が特徴である。この付箋により、描かれた人物の特定が容易となるわけだが、左隻の海上に浮かぶ平氏の船団の中に、模様の入った白い着物を着た人物が確認できる（図7）。その傍らの付箋には「大

図7　大英本に見える「大臣殿」
© The Trustees of the British Museum

図８　平宗盛が乗る船と平知盛の愛馬

臣殿」と書かれており、つまりは平宗盛に比定できる。なお、付箋は付されていないものの、大英本とほとんど異なるところがないとされる天真寺本にも、船上の白い着物を着た人物＝平宗盛が描かれていることが確認できた。屋島合戦ではなく一の谷合戦の図中に確認できるという点で大英本・天真寺本と相違はあるが、本図における問題の人物も平宗盛である可能性が高い。

生田森・一の谷合戦における平宗盛の動向は『平家物語』本文では多くは語られていない。わずかに、巻第九「濱軍」において、源氏軍ら逃げ延びた平知盛が乗り込んだのが「大臣殿の御船」とあるように、戦場から敗走する姿が確認できるばかりである。知盛はその際に、「船には人多く取り乗つて、馬立つべき様も無かりければ、馬をば渚へ追い返さる」と、愛馬を諦めて船に乗り込む。本図には、知盛の愛馬と考えられる騎手のいない馬が渚に描かれており、それが見つめる先の船に宗盛が乗っている（図8）。これまでは、馬の図様のみをもって、知盛の愛馬のエピソードと理解されてきたが、(三六)宗盛と比定できた人物までを含めて一連のものとするべきであろう。他の武将の散り様と比べると、やや地味な印象ではあるが、本図の制作者としては、合戦時の平氏の棟梁である宗盛をどこかに描きたい、描く必要があると考えたのかもしれない。その際に、大英本・天真寺本、もしくはそれらに連なる作品を参照し、そこから鎧では

図９　髷を引き合う武者

なく白い着物をきた宗盛の姿を採用したのであろう。

(3) 群衆の描写

本図の特徴の一つに、『平家物語』の逸話のみならず、群衆や船団を随所に描いて、合戦のエネルギーを表現している点がある。この群衆の一部について、他の作品に類似する表現があることが確認できたため、ここで紹介しておきたい。

本図右隻の第一扇中ごろ、脇差を手にしながら髷をつかみ合う武者が描かれている（図9）。本図においては、生田の森の戦いを描いた箇所であるが、図様に関係する逸話は、『平家物語』諸本いずれにおいても確認することができず、その他大勢の内と考えてよいだろう。やや目を引くものであるが、これと同じ図様は「平治物語絵巻：六波羅合戦巻」にて見出すことができる。同作品は、十三世紀後期頃の成立とされる原本は失われているものの、東京国立博物館が所蔵する白描のもの[三七]を始め、早稲田大学図書館など各所で模本が所蔵されている[三八]。その模本を参照すると、図10のような図様が確認できた。本図の製作にあたって、「平治物語絵巻：六波羅合戦巻」原本かそれを模した作品が参照された可能性はあるだろう。

図10　髷を引き合う武者
（平治物語絵巻：六波羅合戦巻［早稲田大学図書館蔵］より）

おわりに

以上、当館が所蔵する「源平合戦図屏風　一の谷・屋島合戦図」に関して、これまで当館で行ってきた展示や解説からやや踏み込み、『平家物語』本文と図様を対照しながら考察を試みた。筆者は本図を紹介する際、「『平家物語』に語られる武勇伝やエピソードをもとに」を枕詞にしてきたが、本稿における考察の結果、本図は『平家物語』のみを参照するだけでは描き出すことができず、同物語の流布に伴い生み出された様々な関連作品（文学・絵画）から影響を受けていることが判明した。それほどまでに、本図が製作された当時においては、源平合戦のイメージが、起点である『平家物語』のみならず、あらゆる作品を介して定着していたのであろう。

本稿においては、館蔵資料を源平合戦図屏風研究、さらには合戦図全般に関する研究に資することを目標に、基礎整理を試みたが、伊藤悦子氏が言及する粉本や地域性については、具体的に言及するまでに至らなかった。今後、今回取り上げることのできなかった本図中の図様を含めた検証を続ける上での課題としたい。

一　『平家物語』を題材とした絵画作品については、出口久徳氏による「『平家物語』関連絵画一覧」（大津雄一他編『平家物語大事典』東京書籍、二〇一〇）にまとめられている。

二　『蔭涼軒日録』寛正四年（一四六三）閏六月一二日条

三　『看聞日記』永享一〇年（一四三八）六月一三日条

四　『実隆公記』文明一八年（一四八六）五月一九日条

五　川本桂子「『平家物語』に取材した合戦図屏風の諸相とその成立について」（『日本屏風絵集成第五巻人物画―大和絵系人物』講談社、一九七九）

六　田沢裕賀「平家物語一の谷・屋島合戦図屏風の諸相と展開」（『秘蔵日本美術大観一　大英博物館Ⅰ』講談社、一九九二）

七　橋村愛子「近世における『平家物語』の絵画化とその享受について」（『国文学解釈と教材の研究』四七―一二、二〇〇二）

八　出口久徳「源平合戦図屏風の世界　一の谷・屋島合戦図屏風を中心に」（川合康編『平家物語を読む』吉川弘文館、二〇〇九）

九　この合戦については『平家物語』由来の「一の谷合戦」という呼称が一般的であるが、実際の戦場が生田森付近から一の谷付近まで広範囲にわたったことを表現する「生田森・一の谷合戦」という呼称が川合康氏により提起されている（同『源平合戦の虚像を剥ぐ』講談社、一九九六）。筆者もこの見解に賛同し本稿においては、歴史的事象を指す場合は「生田森・一の谷合戦」を用い、作品名においては製作された時代の認識を示してそのまま「一の谷合戦」を用いることとする。

一〇　これまで出された先行研究成果は枚挙にいとまがなく、本稿において具体的に検討するまでには至らなかったが、主だったものを以下に紹介する。

　出口氏は、構図や場面配置より、屏風の描写に物語性やテキスト性を読み取る作業を行い、近世前期における源平合戦図屏風の享受と武家イデオロギーとの関連性を提起する（前註8の他、「一の谷合戦図屏風を読む―ケルン東洋美術館蔵本を中心に―」（『中世文学』四五、二〇〇〇）、「屋島合戦図屏風の世界」（小峯和明編著『平家物語』の転生と再生』笠間書院、二〇〇三）など）。

　須賀隆章氏は、武装描写や屏風の構図、場面配置から絵師の意図を探る検討を示している（「江戸初期「戦国合戦図屏風」の武装描写に関する一考察」（『美術史』五九―二、二〇一〇）、「智積院蔵「一の谷合戦図屏風」をめぐって」（『軍記と語り物』四六、二〇一〇）。

一一　伊藤悦子「「源平合戦図屏風（一の谷・屋島合戦図屏風）」諸本の改変方法と関連資料」（『国学院雑誌』一二〇―四、二〇一九）

一二　本図のカラー全図については、神戸市立博物館編『まじわる文化、つなぐ歴史、むすぶ美　神戸市立博物館名品撰』（神戸市立博物館、二〇一九）に掲載している他、当館ホームページ「コレクション」においても高画質画像を公開している（https://www.kobecitymuseum.jp/collection/detail?heritage=365181）。合わせて参照いただきたい。

一三　『日本屏風絵集成第五巻人物画―大和絵系人物』（講談社、一九七九）にて、個人蔵として掲載。

一四　神戸市立博物館編『源平物語絵セレクション』財団法人神戸市スポーツ教育公社、一九九七

一五　本来このような分析の際には、『平家物語』諸本との校合が必要であるが、筆者の力量不足もあり、本稿で本文を引用する際は原則、近世流布本（高橋貞一校注『平家物語』下、講談社文庫、一九七二、底本は元和九年・一六二三年刊本）から行うこととし、その他諸本については、必要に応じて言及することとする。

一六　高橋貞一校注『平家物語』下（講談社文庫、一九七二、底本は元和九年・一六二三年刊本）

一七　前註一六

一八　前註一六

一九　古谷知新校訂、国民文庫第十五『源平盛衰記』（国民文庫刊行会、一九一〇）、底本は内閣文庫蔵慶長古活字本。

二〇　日本古典文学大系『義経記』（岩波書店、一九五九）

二一　義大夫節正本刊行会編『鬼一法眼三略巻』（玉川大学出版部、二〇〇七）

二二　前註一六

二三　沼波守「悪七兵衛平景清」（『相愛女子短期大学研究論集』一、一九五四）

二四　Webサイト「the能.com」内「演目事典：八島／屋島」https://www.the-noh.com/jp/plays/data/program_019.html（二〇二二年十月二日閲覧）

二五　若月保治『近世初期国劇の研究』青磁社、一九四四

二六　前註一六

二七　新日本古典文学大系『平家物語』下（岩波書店、一九九三）、底本は高野本。

二八　谷口耕一編『校訂延慶本平家物語』（九）（汲古書院、二〇〇三）、底本は大東急記念文庫本。

二九　前註一九

三〇　『日本国語大辞典』による。

三一　安土桃山時代、十六世紀、紙本著色。画像は、神戸市立博物館編『まじわる文化、つなぐ歴史、むすぶ美　神戸市立博物館名品撰』（神戸市立博物館、二〇一九）に掲載の他、当館ホームページ「コレクション」においても公開（https://www.kobecitymuseum.jp/collection/detail?heritage=367284）。

三二　智積院蔵「一の谷合戦図屏風」の図版は、海の見える杜美術館編『平家物語絵―修羅と鎮魂の絵画』（ロータスプラン、二〇二二）を参照した。

三三　前註一四

三四　図版は、『秘蔵日本美術大観一　大英博物館Ⅰ』（講談社、一九九二）の他、大英博物館ホームページのコレクション検索（https://www.britishmuseum.org/collection/object/A_1950-1111-0-22、二〇二二年十月二日閲覧）も参照した。

三五　前註五

三六　前註一四

三七　列品番号A-1570_1。https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0092560（二〇二二年十月二日閲覧）

三八　滝澤みか「早稲田大学図書館所蔵『平治物語絵巻　六波羅合戦巻』について」（『早稲田大学図書館紀要』六二、二〇一五）